

『即興のレクイエム』松田佐津子



令和2年3月 柘書房刊

令和二年三月末『即興のレクイエム』を上梓しました。折りしもコロナ禍による集会禁止の事態となりました。四月初めに歌集を発送し、沢山の御批評、御感想を頂き誠に有難く記念とさせて頂きました。

令和二年コスモス六月号の歌集批評特集に、四野宮和之様から頂いた御批評は、私にとって嬉しい御褒美でありました。終生の宝物にさせて頂きます。

顧みますと、私十歳の時に日中戦争が始まり、太平洋戦争へと拡大し、十六歳で学徒動員令により名古屋市の飛行機製作工場へ……日夜空襲の中逃げ惑いました。私の世代の学びの時は戦争によって散々なことでした。

結婚後は二人の子育て、義父母の看取りを終えてコスモス入会は一九九六年でした。晩学の身でおこがましいとは思いましたが、歌集は私の終生の記念となりました。歌集名は夫亡き二ヶ月後、孫がピアノコンサートの時、即興演奏したレクイエムから名づけました。

奥村先生、コスモスの皆様へ厚く御礼申しあげます。

——歌集の著者から——

『展開図』小島なお



令和2年4月 柘書房刊

第一歌集『乱反射』を出したのが二〇〇七年だった。二十歳の記念に、と考えていたことを思い出す。いまだはあまりめずらしくなくなったけれど、当時は二十歳で歌集を出すのはかなり若くて、でもそのことにすら自覚的でなかったくらいで、逆にいえばそれくらい無自覚でなければ出す勇気がでなかったと思う。

歌集を出したことで、不思議だけれど、自分が短歌をやっているということちゃんと知った。それまでも新聞歌壇に投稿したりして作っていたけれど、短歌はつねに自分のノートや携帯電話のなかにあった。それが本形になったことで、自分のあずかり知らぬところで誰かが自分の短歌を読んでくれるかもしれない。自分はそれを知ることができないし、はずかしいから止めて、とも言えなくなつた。自分の短歌がすこし自分のものではなくなくなった気がして、これが短歌をやるといふことなんだ、と途方もないようなはるばるとした気持ちを押し寄せた。

『王妃の妄語』 田村悦子



令和2年4月 柘書房刊

拙歌集『王妃の妄語』を上梓して二年半経ちました。

振り返れば、本誌にご批評を賜った才野洋様を始め多くの皆様方から、貴重なご高評と励ましを頂いたことに改めて感謝申し上げます。また装丁がタイトルに相応しいと、お褒めいただき嬉しく思いました。ところで、歌集にも載せましたが、私は四年前に歌会の仲間と新所帯を持ちました。彼には五人の孫がおりますが、その中の三人の女孫はカタカナ職業を目指す二十歳の大学生達。

その口から出るのは「十代のお肌のキメを長く保つには」と、何とも無邪気でもとても真剣。今の時代なら全て満たされそうとガールズトークは続き、どこそこの美容外科は何々が得意とか、かなりの情報通です。

そのうち八十代の深刻な皮膚状態の私へ頼もしい進言が集まり、近々その一人に連れられて、カウンセリングを受けに行く羽目となりました。

効果の程は妄想の第二歌集、仮題『センチナリアンの妄語』として孫達に伝えられたら愉快だろうと思います。

——歌集の著者から——

『無垢の落下傘』 浅田ヒテ子



令和2年5月 柘書房刊

今回の歌集は、2003年出版の『青き海光』に続く2冊目となります。卒寿を過ぎての出版であり、挑戦する気持ちで取り組みました。田中愛子様のご指導をいただき、出版できましたこと改めてこの場をお借りしてお礼申し上げます。

今回の歌集は、特攻隊員として従軍し、復員後まもなく亡くなった兄のことが忘れられず、その兄や、この歳になり感じる夫や家族への思いを題材として、また、老いの中、物事へのこだわりが一つ、二つと消えてゆく寂しさも感じながら詠んだ歌集です。

旅の中、亡き兄と同名の肥薩線「真幸駅」での見知らぬ人との出会い、山の公園でひとり詠むひととき、家族との日常、その中で詠む歌を通して過去とこれからの自分を探してきました。

また、この出版で多くの仲間や、思わぬ方からの連絡もあり、歌でのつながりはすばらしく、これからの私を支えてくれることと思います。